

ジョナサン・ホープの作者同定研究の功罪

太田, 一昭
九州大学

<https://doi.org/10.15017/1924423>

出版情報：言語文化論究. 40, pp.1-14, 2018-02-27. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

ジョナサン・ホープの作者同定研究の功罪

太田 一 昭

はじめに — ホープの統計的作者同定研究の評価、『二重の欺瞞』の原作者論争

ジョナサン・ホープ (Jonathan Hope) は、シェイクスピアの言語研究者として世界的に知られる。比較的最近出版した著書として *Shakespeare's Grammar* (2003) と *Shakespeare and Language* (2010) があるが、近年シェイクスピア学者が最も注目しているホープの著作は、ほぼ四半世紀前に刊行された *The Authorship of Shakespeare's Plays: A Socio-Linguistic Study* (1994) であるかもしれない。これは、シェイクスピアが他の劇作家と共同執筆したとされる戯曲 (『ヘンリー八世』、『血縁の二公子』、『ペリクリーズ』、『サー・トマス・モア』、『エドワード三世』、『二重の欺瞞』その他) の「作者」を言語学的データに基づいて統計的に推定する研究書である。シェイクスピアの「共作劇」に関する論考は多いが、本書は近年の作者同定研究において最もよく引用される文献の一つである。本稿の目的は、この本の「功罪」を再検討することにある。というのも、私見によれば、作者同定研究者たちがホープの論考の意義を十分に理解しているとは思われない光景に遭遇することが多いからである。

シェイクスピアの「共作劇」の中で近年最も注目されている作品の一つは、『二重の欺瞞』 (*Double Falsehood*) である。これはスペインを舞台にした芝居で、作者は、18世紀のシェイクスピア全集編纂者として知られるルイス・ティボルド (Lewis Theobald) である。ある女性が好きでもない男と強制結婚させられそうになるが、間一髪でその結婚を逃れて結局愛する男と結ばれるという悲喜劇である。初演は1727年、翌28年に初版が刊行されている。その初版 (1728) タイトル・ページによれば、この劇はティボルドのオリジナル作品ではなく、シェイクスピアの原作を舞台用に改作・翻案したものだという。これに対して、シェイクスピア原作というのは事実ではなく、『二重の欺瞞』はティボルドの偽作だという見方がある。このティボルド偽作説に対しては、それを否定する研究者たちの声が最近大きくなり、少なくとも原作の一部にシェイクスピアが関与しているという主張が一定の支持を得て、アーデン版 (Hammond 編) で出版されたり、新オクスフォード・シェイクスピア全集にその原作とされる『カーディニオー』の「断編」 (Taylor 編) が収録されたりしている。この『二重の欺瞞』の原作者あるいは原作者の一人はシェイクスピアだとする研究者たちがよく援用する研究書が、ホープの *Authorship of Shakespeare's Plays* である。テイラー (Taylor, “Sleight of Mind” 139) もハモンド (Hammond, “The Forgery Hypothesis” 177) も自説の補強として引用している。興味深いのは、彼らに反対の立場つまりティボルド偽作説を唱えるティファニー・スターン (Stern, “The Forgery of some modern Author” 555-93) のような研究者もまたホープの論考を brilliant と評価しているということである (Stern, “Fletcher and Theobald as Collaborative Writers” 130)。以下本論で、『二重の欺瞞』の作者をめぐる議論を中心に、ホープの作者同定研究の内実を再検討してみたい。

1. ホープの社会・歴史言語学的解析方法

ホープは3つの言語項目——助動詞 do、関係代名詞 (who, which, that)、二人称代名詞 (thou, you) の係る用法——の作家間差異を調査している。この中で特に重視するのは助動詞 do の用法である。現代英語では助動詞の do は主として疑問文と否定文で使われる。強調構文で使われることもある。しかし初期近代イングランド（つまりシェイクスピア時代）においては、これらの構文における do の用法は流動的で、疑問文や否定文において助動詞 do を使うか使わないかは任意であった。たとえば「あなたは帰宅しましたか」は、Went you home? と言うことも Did you go home? と言うこともできた。また肯定平叙文において他の動詞とともに do を用いたからといって、強調文とはかぎらなかった。この助動詞 do の係る4つの文型（肯定平叙文、否定平叙文、肯定疑問文、否定疑問文）は、次のようである（12）。

Table 2.1 Regulated and unregulated use of the auxiliary 'do'

-
1. *Regulated sentences (now standard)*
 - (a) positive declarative: I went home
 - (b) negative declarative: I did not go home
 - (c) positive question: Did you go home?
 - (d) negative question: Did you not go home? / Didn't you go home?
-
2. *Unregulated sentences (now non-standard)*
 - (a) positive declarative: I did go home
 - (b) negative declarative: I went not home
 - (c) positive question: Went you home?
 - (d) negative question: Went you not home?

上段は今日では標準とされる使い方で、下段は現代では非標準とされる用法である。シェイクスピア時代には標準的用法 (regulated use) と非標準的用法 (unregulated use) とが混在していて、作者によってその使い方が異なっていたとホープは指摘する。用法はどうか作家の育った環境とか、受けた教育とか、世代によって異なるらしい。どちらかと言えば、年長者より若い世代が、田舎育ちより都会育ちが、高等教育を受けた者がそうでない者よりも新しい variant を使う傾向が強い。ホープは自分の論考を社会・歴史言語学的の研究と呼んでいるが、作家の使っている言語をこのように歴史的かつ社会的見地から比較分析しているからである。そのような観点から、たとえばシェイクスピアとフレッチャーを比較すればどうなるか。シェイクスピアはストラットフォードの田舎育ちで、大学教育も受けていない。フレッチャーはシェイクスピアより15歳ほど若く、そして父親がロンドン主教でロンドン育ち、おそらくケンブリッジで教育を受けたと思われる。となれば、フレッチャーがより現代に近い、比較的標準的な助動詞 do の使い方をするのではないかと予想される。ホープの調査によると、シェイクスピアはフレッチャーその他の同時代劇作家より、非標準的な助動詞 do の用法が多い。ホープは、シェイクスピアおよび同時代劇作家計6名の単独執筆作品のサンプル調査をしている。巻末のアペンディックス (156-57) の統計データによれば、ホープが比較対照のために調査した6劇作家の標準用例率（百分率）は次のとおりである。計算式は、「標準用例数」÷（「標準用例数」+「非標準用例数」）×100である。かっこ内の数字は、サンプル劇数である。

シェイクスピア (16) 82	マーロウ (3) 87	デカー (4) 88
フレッチャー (10) 92	ミドルトン (5) 90	マシンジャー (5) 90

シェイクスピアの標準用例率は、他の劇作家よりかなり低い。シェイクスピアは比較的古い用例が多く、他の劇作家は比較的現代の標準用法に近い構文が多い。ホープは、後述するように、この作家間差異データを基本資料として、シェイクスピアの「共作」の執筆者の識別を試みている。

ホープはまた、関係代名詞、二人称代名詞の用法の作家間差異データがどの程度作者識別に使えるかも検証している (27-64)。ホープによれば、後者は作者同定ツールとしてほとんど使えないが (64)、関係代名詞の用法データは (助動詞 do ほどの弁別力はないものの) do 助動詞用法の作家間比較に基づく解析の補完として使えるという (53)。周知のように、関係代名詞 (who, which, that) の用法も、do 助動詞と同じく、現代とは多少異なっている。現代英語では人を先行詞とする関係代名詞は who であるが、初期近代英語では which を使うこともある。逆に、物を先行詞として who を用いることもあった。that は制限用法で使うのが現代英語の標準であるが、シェイクスピア時代は、非制限用法でも使う。また現代英語では関係代名詞を使うところで関係代名詞を省くこともある。どちらを使うかは任意であって、作家によって異なる¹。ホープは、この作家間差異データを補助的資料として作者推定に利用している。

2. 『二重の欺瞞』、『エドワード三世』の統計データと原作者推定

『二重の欺瞞』の幕場ごとの do 助動詞の係用例頻度調査結果は、下記のようなものである (164-65)。1.01 は 1 幕 1 場、2.01 は 2 幕 1 場を表す。reg は標準用例数である。unreg は非標準用例数である。N は両用例の合計値である。% reg は標準用例率である。

Table A5.5 Auxiliary 'do' use in *Double Falshood*

	1.01	1.02	1.03	2.01	2.02	2.03	2.04	3.01	3.02	3.03	4.01	4.02	5.01	5.02	total
reg	16	63	27	14	12	69	14	11	31	51	97	38	31	95	569
unreg	3	14	3	1	5	3	6	2	9	7	12	1	3	11	80
N=	19	77	30	15	17	72	20	13	40	58	109	39	34	106	649
% reg	84	82	90	93	71	96	70	85	78	88	89	97	91	90	88

ホープのサンプル調査では、シェイクスピア後期作品 (計10戯曲) の標準用例率は82パーセントである。これに対してフレッチャーは、92パーセントである。ティボルドのオリジナル戯曲『ペルシャの王女』は93パーセント、翻案戯曲『リチャード二世』は87パーセントである (92)。この差異と上掲のデータに基づき、1 幕 2 場の原作者をシェイクスピア、2 幕 3 場、4 幕 1 場、5 幕 2 場の原作者をフレッチャーと推定する。たしかに上掲のデータに基づけば、この 4 つの場の執筆者区分は合理的かもしれない。フレッチャー原作とされる場は89パーセント以上のフレッチャーに近い標準用例率であり、シェイクスピア原作とされる場はシェイクスピアと同率の低い標準用例率である。頻度データもある程度の量が確保されており、二人の作者が関与していると判断できるほどの有意差を認めることができる。ホープは、助動詞 do の用法から得られる「証拠」は 2 人が執筆にかかわっていることを強く示唆し、ティボルドの偽作を否定するものだと指摘する。

『二重の欺瞞』の関係代名詞の用法については、「シェイクスピア作」とされる部分のデータがシェイクスピアの後期作品のそれとかなり異なっているが、「フレッチャー作」部分については、フレッチャーの筆を強く示唆するデータが得られており、『二重の欺瞞』はシェイクスピア - フレッチャーの共作戯曲の18世紀の翻案だという説と強く矛盾するものではないという (99-100)。ホープは結論

として、『二重の欺瞞』がシェイクスピアとフレッチャーの共作劇に基づくという前提に立てば、2幕2場までは「比較的シェイクスピア的」のようであり、それ以降は「比較的フレッチャー的」のように思われると述べている (151)。

もう一つ別の劇の do 助動詞用例解析の例を見てみよう。次の表は、『エドワード三世』の調査結果である (173)。この劇は近年、シェイクスピアの共作との評価がほぼ確立した作品である。

Table A6.14 Auxiliary 'do' use in *Edward III*

	1.01	1.02	2.01	2.02	3.01	3.02	3.03	3.04	3.05	4.01	4.02	4.03	4.04	4.05	4.06	4.07
reg	34	49	107	61	56	30	53	4	28	10	15	14	57	37	2	11
unreg	9	5	32	7	7	6	9	1	2	1	2	5	10	10	4	1
N=	43	54	139	68	63	36	62	5	30	11	17	19	67	47	6	12
% reg	79	91	77	90	89	83	86	80	93	91	88	74	85	79	33	92
	4.08	4.09	5.01	total	Acts 1-2	Acts 3-5										
reg	3	14	58	643	251	392										
unreg	2	2	14	127	53	74										
N=	5	16	72	770	304	466										
% reg	60	88	81	84	83	84										

この統計データは、シェイクスピアが『エドワード三世』の作者であることと矛盾しないとホープは言う。ホープはまた、劇の（シェイクスピアの筆が入っているとされる）前半（第1幕、第2幕）と後半（第3幕～第5幕）とを比較しているが、助動詞 do の標準用例率作家間比較データは劇が共作であるという仮説を裏づけない（つまり前半と後半で有意差がない）と指摘する (135)。関係代名詞の用法データも、この劇に二人の作者が関与している証拠とはなりえず、全体としてみれば、シェイクスピアの単独執筆を裏づけるという (136-37)。こうしてホープは、『『エドワード三世』はシェイクスピアの外典作品 (apocrypha) から正典 (canon) に含める最有力候補であることに強い疑義をつきつける調査結果は全く見いだせなかった』 (137) と結論する。

ホープの統計分析は、『エドワード三世』がシェイクスピアの単独作品であるのか、複数の執筆者によるものかについては歯切れの悪いところがあるが、シェイクスピアが『エドワード三世』の創作に関与している可能性をある程度説得的に説明している（『エドワード三世』全体としての do 標準用例率はシェイクスピアに近い84パーセント）。ある程度というのは、今日多くの学者がシェイクスピア作と判定する場 (1.02, 2.01, 2.02, 4.04) に、標準用例率に基づけばシェイクスピア作とは決して言えない場 (1.02, 2.02) が含まれているからである。またホープが比較したのはマーロウを除けば、比較的若い劇作家（デカー、フレッチャー、ミドルトン）に限られており、このデータだけで結論を出すのは無理がある。ホープの統計データから言えることは、『エドワード三世』は全体としてみれば、どうやらこの劇の執筆にシェイクスピアより若い世代の劇作家は関与していないらしいということだけである²。

『二重の欺瞞』や『エドワード三世』の作者同定作業に限らず、ホープのデータの収集・分類・解析は、首尾一貫した基準によって非常にシステムティックに行われており、表とグラフを用いた解析結果の提示方法も明晰である。ホープの収集したデータは、コンピューターを利用した近年の統計解析の扱うデータ量に比べるとわずかなものかもしれない。しかしホープが手作業で収集した言語データは、英語が初期近代イングランドにおいていかに変容しつつあったかを実証的に裏づける

貴重な資料である。ホープは、それを著書において惜しげもなく公開している。資料は、生データつまり助動詞 do の標準・非標準用法その他の用例の粗頻度を含む。粗頻度を含む資料ということは、他の研究者が容易に検証できるということである。それだけホープの資料の信頼度は担保されるということでもある。

このように、ホープの統計解析はすぐれた研究であると思う。特に膨大なデータの収集と分析とを一人で、手作業でやったということに瞠目し、深甚の敬意を払いたい。しかしその『二重の欺瞞』の原作者同定には、いくつか疑念が残る。第一、シェイクスピアを原作者の一人として前提としていること。というのも、『二重の欺瞞』には「シェイクスピアの筆致をうかがわせる台詞は一つもない」(Chambers 542) のような見方が少なからず存在するからである。もちろん逆に、シェイクスピアの筆の可能性を指摘する人も多く存在する (Bradford, Oliphant, Jackson, Muir 等々)。これらのシェイクスピアの関与を主張する人々でさえ、『二重の欺瞞』の措辞はシェイクスピアの晩年のスタイルとは違うことを認めている。この違いは、シェイクスピアのスタイルを18世紀の趣味、好みに合うようにティボルドが改変したからだ、彼らは言う。つまりティボルドが書き変えていなければ、シェイクスピアの原作がそのまま残っているはずだというのである。しかしティボルドが(あるいは他の作家が)シェイクスピアの原作を改作したとすれば、語彙も、韻律も、語順その他の言語的特質も変化すると思われるが、そのように「上書き」された言語について、シェイクスピア原作を前提として統計処理を行うことの当否について、十分に検討されているとは思われない。説得力ある結論を導き出すには、シェイクスピア原作を所与の事実として解析するのではなく、ティボルドおよび『二重の欺瞞』の改作に関与している可能性が指摘されている作家(たとえばマシージャやダヴェナント)についてもシェイクスピアと同一の地平で比較検証を行う必要がある。

第二、ホープのデータは、統計学的にあいまいな点を多く含んでいる。ホープの『二重の欺瞞』の個別の場の執筆者同定は、比較的頻度データの大きい場についてだけ行われている。これは当然のことである。しかしデータ量は小さくとも、(シェイクスピア原作とされることが多い)劇の前半部のデータにシェイクスピア原作を否定するものが含まれている(1幕3場、2幕1場は、シェイクスピアにしては、標準用例率が高すぎる)。また(ホープの推定とは異なり)2幕3場と2幕4場はティボルド作だとされることがあるが、その標準用例率は、ティボルドの作品データと大きく異なっている。もちろんこれらの場のほとんどは頻度データが小さく統計解析になじまないのであるが、それでもこういうところに、ホープの助動詞 do 用法データによる作者識別の危うさが見え隠れする。

3. 『血縁の二公子』の統計解析の問題点

ホープの助動詞 do の用法に着目する作者同定の危うさは、『血縁の二公子』のデータ分析によく現れている。この劇の各場の助動詞 do の標準用例数、非標準用例数、両用例数合計値、標準用例率は次の表 (Hope 164) のとおりである。P はプロローグを、E はエピローグを表す。section A とはシェイクスピア作とされる部分であり、section B とはフレッチャー作とされる部分である。ホープはこのデータに基づいて、暫定的に次のように作者区分をする。Unassigned とは、この段階ではいずれの作家とも特定されない場である。枠(筆者加筆)に囲まれた場は、従来シェイクスピア作と区分されている場である。

Table A5.3 Auxiliary 'do' use in *The Two Noble Kinsmen*

	P	1.01	1.02	1.03	1.04	1.05	2.01	2.02	2.03	2.04	2.05	2.06	3.01	3.02	3.03	3.04
reg	16	62	40	33	12	5	18	76	21	19	22	12	39	13	15	6
unreg	0	7	14	5	1	0	2	3	3	1	0	1	4	3	2	0
N=	16	69	54	38	13	5	20	79	24	20	22	13	43	16	17	6
%reg	100	90	74	87	92	100	90	96	88	95	100	92	91	81	88	100

	3.05	3.06	4.01	4.02	4.03	5.01a	5.01b	5.02	5.03	5.04	E	total	section A	section B
reg	51	118	81	60	27	12	46	43	39	65	6	957	372	585
unreg	2	4	4	3	3	0	6	3	11	7	2	91	60	31
N=	53	122	85	63	30	12	52	46	50	72	8	1,048	432	616
%reg	96	97	95	95	90	100	89	94	78	90	75	91	86	95

Shakespeare: 1.02, 5.03

Fletcher: 1.01, 2.02, 3.05, 3.06, 4.01, 4.02, 5.01b, 5.04

Unassigned: P, 1.03, 1.04, 1.05, 2.01, 2.03, 2.04, 2.05, 2.06, 3.01, 3.02, 3.03, 3.04, 4.03, 5.01a, 5.02, E

この中で3つの場(1.01, 5.01b, 5.04)はデータ量(標準用法と非標準用法の出現頻度の合計値)が統計解析に十分な大きさであるとホープは判断して、暫定的に(シェイクスピアではなく)フレッチャー原作と区分する。しかしこれでは従来の執筆者区分との乖離が大きい。そこでホープはどうか。助動詞 do に係る4文型のうちの一つである非標準用法の肯定平叙文(“I did go home”の文型)の比率で再検証し、シェイクスピア・セクションとされる場がフレッチャー・セクションより有意に非標準用例比率が大きいとする(86-87)。各場の助動詞 do の非標準肯定平叙文率は、次の表(87)のとおりである(分母は肯定平叙文の標準用例数と非標準用例数の合計値、分子は非標準用例数)。

Table 5.7 Unregulated positive declarative sentences as a percentage of all positive declarative sentences in *The Two Noble Kinsmen*

‘Shakespeare’ scenes (section A)

	1.01	1.02	1.03	1.04	1.05	2.01	3.01	3.02	5.01b	5.03	5.04
%‘do’	5	13	9	8	0	6	3	0	12	19	7

‘Fletcher’ scenes (section B)

	P	2.02	2.03	2.04	2.05	2.06	3.03	3.04	3.05	3.06	4.01	4.02	4.03	5.01a	5.02	E
%‘do’	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	0	0	0

ホープはこれらの解析結果として最終的に、次のように各場の執筆者を区分する(87)。

Shakespeare: 1.01, 1.02, 1.03, 1.04, 1.05, 2.01, 3.01, 3.02, 5.01b, 5.03, 5.04

Fletcher: P, 2.02, 2.03, 2.04, 2.05, 2.06, 3.03, 3.04, 3.05, 3.06, 4.01, 4.02, 4.03, 5.01a, 5.02, E

見事にシェイクスピア学者のコンセンサスと一致している。しかしこれは、誠実とは言えないデータ処理である。肯定平叙文率の両劇作家間差異データによればたしかに、シェイクスピアとフレッ

チャーのセクションは有意差を示しているように見える。しかしこのデータは相対的出現頻度であって、粗頻度ではないことに注意する必要がある。筆者の調査によれば、1.01（5%）の粗頻度は2、1.02（13%）は4、1.03（9%）は3、1.04（8%）は1、2.01（6%）は1、3.01（3%）は1、5.01b（12%）は5、5.03（19%）は9、5.04（7%）は5である³。非常に小さい数値である。統計解析においては、比較対照サンプルの粗頻度が5未満あるいは5以下の粗頻度データの比較対照は信頼度が劣るとされる。だとすれば、この方法による執筆者識別に妥当性があると言うのであれば、それを担保する検証が必要である。つまり複数の作者の判別にこの指標による識別が有効であることをまず立証する必要がある。少なくとも、シェイクスピア単独執筆作品とフレッチャー単独執筆作品の頻度データとを、広範囲かつ詳細に比較しない限り、なんの結論も出せないはずである。しかしそのような慎重な手続きは踏まれていない。

ホープの言う非標準用法の助動詞 do 肯定平叙文は、いわゆる pleonastic “do” のことである。これについては、マリナ・ターリンスカヤ (Marina Tarlinskaja) の詳細な研究がある。*Shakespeare and the Versification of English Drama, 1561-1642* (2014) である (pleonastic “do” については同書29頁参照)⁴。彼女のデータによれば、シェイクスピア劇で最も低い pleonastic “do” 出現率の劇は『ヘンリー四世・第2部』で、1,000行当たりの出現数は14.6である。最も高い『夏の夜の夢』は65.6である (*Shakespeare and the Versification*, Table B. 4)。『ヘンリー八世』と『血縁の二公子』のフレッチャー執筆部分はそれぞれ3.7と0.8、フレッチャー単独執筆作品『ボンドゥーカ』 (*Bonduca*) は5.9である (Table B. 16)。他のフレッチャー単独執筆劇についてはターリンスカヤのデータがないが、フレッチャー作品における出現頻度は全体として、シェイクスピアよりかなり小さいというのが、フレッチャー作品にざっと目を通しての筆者の印象である。非常に大雑把であるが、pleonastic “do” (非標準用法の助動詞 do 肯定平叙文) の出現頻度を (ターリンスカヤのデータを参考にして) シェイクスピア劇 (1,000行当たり) 40.1、フレッチャー劇3.5として計算すると、『血縁の二公子』1幕1場234行 (アーデン版) における pleonastic “do” の出現粗頻度期待値は、シェイクスピア執筆を前提とすれば9.4 ($40.1 \times 234 \div 1000$)、フレッチャー執筆を前提とすれば0.82 ($3.5 \times 234 \div 1000$) となる。一方『血縁の二公子』1幕1場の非標準用法の肯定平叙文の実測値 (粗頻度) は2である。この数値では、シェイクスピアともフレッチャーとも判定できないとするのが妥当である⁵。5幕3場のように、この計算式でもシェイクスピア執筆と判定できる場もあるが、それでも助動詞 do 非標準用法の肯定平叙文出現率による判定に危うさがあることは否定できない。付言すれば、もし非標準用法の肯定平叙文の比率に基づく再検証が妥当だとされれば、4用法の作家間差異データに基づく作者同定の妥当性の否定につながってしまう可能性がある。筆者には、ホープはここで (データに即して誠実かつ適正に解釈することを放棄し) シェイクスピア学者の従来コンセンサスに抗うのを避けるかのように、帳尻を合わせているように見える。しかし統計解析は通常一定の誤差を含むものであって、部分的に全体の仮説に適合しないことがあっても大きな問題ではない。一般的な執筆者区分と相いれないデータがあっても、ホープは無理に帳尻をあわせるのではなく、助動詞 do に係る4文型の標準・非標準用法のデータ解析結果に語らせるべきであった。あるいは助動詞 do の非標準的肯定平叙文のデータを判定基準とするのであれば、その粗頻度データを開示し、シェイクスピア劇とフレッチャー劇のデータとの比較検証を通して結論を下すべきであったと思われる。

4. ホープの言語学的統計解析の可能性と限界

筆者は先に、ホープの解析は首尾一貫した基準によって非常にシステムティックに行われている

と述べた。実は厳しい言い方をすれば、必ずしもそうではない。常に助動詞 do に係る 4 文型の標準・非標準用法のデータに基づいて判別するのではなく、都合に合わせてそのうちの 1 つのデータによる解析に切り替えるのもそうであるが（これは言うてみれば、得点を上げやすいように、ゴールポストを移動させるようなものである）、ホープのデータの解釈は時として恣意的で、一貫性の欠如を見せる場合がある。上述のように、ホープは『二重の欺瞞』の 4 つの場は、1 つをシェイクスピア原作、3 つをフレッチャー原作と区分しようとしている。このように解析できるのは、それぞれの場について一定の大きさの粗頻度データが得られているからである。そのデータの下限はどの程度なのか。ホープは解析可能なのは、全部で 5 つの場だとしている。すなわちこの 4 つの場と、第 3 幕 3 場である。ホープは、3 幕 3 場はボーダーラインとしていずれの作者にも区分していないが、この 5 つの場の助動詞 do に係る全用例出現頻度の最小値は 58 である。これがホープの解析データのおおよその下限であるとすれば、『エドワード三世』にはホープの解析対象（執筆者判別対象）となる場が（4 文型用例出現頻度計 54 の 1 幕 2 場を含めて）7 つある。実際ホープは、有意のサンプルサイズをもつ場は全部で 7 つと書いている（135）⁶。だとすれば、『エドワード三世』1 幕 2 場と 2 幕 2 場と 3 幕 1 場は、シェイクスピア以外の（標準用例率の高い）劇作家によって執筆された可能性が高いと判定すべきである。しかしホープはそうのように判定しない。ホープはこう書いている。7 つの場のうち 4 つ（2.01, 3.03, 4.04, 5.01）は、シェイクスピア的な標準用例率として認めることができる。残り 3 つ（1.02, 2.02, 3.01）は、比較的低い標準用例比率とサンプルサイズであることを考慮すれば、シェイクスピア的でない（non-Shakespearean）と断定できるものは 1 つもない（135）。残念ながら、ホープのこの説明に説得力はない。というのも、『二重の欺瞞』の解析結果との整合性がないからである。89 パーセント以上の標準用例率を示している場をフレッチャー原作の可能性が高いとする『二重の欺瞞』の執筆者判定基準によれば、『エドワード三世』の少なくとも 1 幕 2 場、2 幕 2 場、3 幕 1 場はシェイクスピア作ではないと判定せざるを得ないはずである。というのも、この 3 つの場は、89 パーセント以上の標準用例率を示しているからである。ホープは明らかに、ダブル・スタンダードの陥穽に陥っている。ホープがそのように判定しなかったのは、それがホープ自身の『エドワード三世』の執筆者判定の結論——『エドワード三世』はシェイクスピアの外典作品から正典に含める最有力候補であることに強い疑義をつきつける調査結果は全く見いだせなかった——と齟齬をきたすからであろう。

『二重の欺瞞』は、改作・翻案劇だとされる。もし翻案作品であれば、統計解析の言語資料の選択に慎重さが求められる。というのも、その作品は翻案者による先行劇作家の模倣語句を含んでいるかもしれないからである。この点においてホープの『二重の欺瞞』解析は、適切とは言えない。ホープの資料によれば、『二重の欺瞞』における助動詞 do の非標準用例の出現数は 80 である。問題は、その非標準用例の内実である。筆者が調査したところ、80 のうち 10 は、I または you を主語とする“know not”という否定平叙文である。現代英語では I/you do not know が標準であるが、“I/you know not”には do が用いられていない、つまり非標準的用法である。このカテゴリーに問題は無い。問題は、この句は簡単に模倣できるものだけということである。しかもこの句が『二重の欺瞞』には相対的に非常に多く現れる。これがいかに多いかは、シェイクスピア作品との比較で瞭然とする。シェイクスピア 37 作品について筆者が調査したところ、know not のフレーズは 200 回（この中には少数の we, they その他を主語とするものも含まれる）出現する。1 戯曲あたり 5 回強である。最大は『オセロー』（3,229 行）⁷ の 15 回（I を主語とするもの 12 回、you を主語とするもの 3 回）である。劇の長さに対して相対的に最も多いと思われるのが『ジュリアス・シーザー』（2,450 行）で、非標準用例（know not）は 13 である。ホープによれば、『オセロー』の 4 文型すべての標準用例数は 899、

非標準用例数は236である。全4文型非標準用例236中 know not 用例の比率は約6.4パーセントである。『ジュリアス・シーザー』はホープのシェイクスピア・サンプルには含まれず統計データが存在しないが、『間違いの喜劇』(1,777行) 131、『ヴェニス商人』(2,554行) 185の非標準用例数から推定すると、『ジュリアス・シーザー』の全非標準用例数は170前後であるかもしれない。かりに170であったとすれば、『ジュリアス・シーザー』の know not 用例の比率(全非標準用例数に占める割合)は7.6パーセントである。ホープは、フレッチャーの戯曲から10編をサンプル・テキストとして選定し分析している。その10編の作品における、know not の出現頻度は、シェイクスピアとほぼ同じである(1作品平均約5回出現、全非標準用例数に占める割合7.5パーセント)。これに対して『二重の欺瞞』(ハモンド編『二重の欺瞞』によれば、プロローグとエピローグを除き1,816行)は、非標準用例80のうち10(12.5パーセント)が know not の文型である。ホープのデータによれば、『二重の欺瞞』の助動詞 do の非標準用例頻度はシェイクスピア劇より6~7パーセント低いのであるが、know not 文型だけは突出して多いと言える。ちなみにティボルドの他の17作品には、know not の構文はほとんど現れない(1作品平均、0.5以下の出現頻度)。実は『二重の欺瞞』には、do 助動詞を用いない(現代では標準とされない)否定文(動詞+ not の文型)が非常に多く現れる。雑な試算であるが、オンライン・データベース *English Drama* を使って思いつくままに次のフレーズの出現頻度を調べてみた。

come not, weep not, weepe not, fear not, feare not, speak not, speake not, keep not, keepe not, lie not, lye not, know not, knowe not, looke not, look not, take not, make not, think not, thinke not, give not, feel not, feele not

上記のフレーズのシェイクスピア劇37編における出現数は計404、1作品平均10.9であった。これに対して(シェイクスピア劇より行数の少ない)『二重の欺瞞』の出現数は25であった。ティボルドあるいは他のシェイクスピア以外の作家が意図的に比較的シンプルな非標準的否定文を(『二重の欺瞞』に古風な趣を与えるために)多用したのだと断定はできないが、しかしその可能性も捨てきれない⁸。というのも『二重の欺瞞』における非標準的否定平叙文(動詞+ not の文型)の相対的出現頻度がシェイクスピア劇よりかなり高いからである(少なく見積もってもおそらく3倍以上)。作品を偽造しようとするのとどこかにひずみが出てくるのではないかと思われるが⁹、要するに、筆者でも思いつくようなフレーズを不自然に多く含むデータに基づいて『二重の欺瞞』の執筆者識別を試みるのは適切ではないということである。『二重の欺瞞』に関するホープの言語データは残念ながら、そういう信頼度の劣る統計資料であると判断せざるを得ない。

結 び

繰り返すが、ホープの *Authorship of Shakespeare's Plays* は良書である。分析方法は明晰であり、結果の提示方法も全体として適切で、誠実である。ブライアン・ヴィカーズは、ホープの助動詞 do の用法に着目した分析方法は作者識別の新しい強力なツール(a new and powerful authorship tool)と評価しているが(Vickers 121)、そのような好意的な評価も首肯できる。しかし作者識別ツールとして過信すべきではないと考える。ホープの分析方法はたしかに、作者識別ツールとして十分に使える場合がある。たとえばシェイクスピアとマーロウ、あるいはシェイクスピアと(世代が異なる、つまりシェイクスピアよりかなり若い)フレッチャーのコーパスを比較すればかなりの精度で識別

が成功すると思われる。筆者は実際にホープのデータを使って、シェイクスピアとマーロウをカイ二乗検定にかけて両劇作家の弁別ができるか試みてみた。シェイクスピアとマーロウ間には、厳しく有意水準0.01（1%）で判定しても、有意差ありの結果が出た（ただし、マーロウ作品の比較対照テキストの選択と、わずか3戯曲というサンプルサイズが適切であるかの疑問は残る）。しかし英国歴史劇というジャンルが同じ2作品（『リチャード二世』と『エドワード二世』）については、一般的な（比較的緩やかな）有意水準0.05（5%）で判定しても有意差ありとは認められないという結果であった¹⁰。つまりホープのデータによる、両歴史劇の執筆者識別は（少なくとも統計学的には）不可能ということである。シェイクスピアとマーロウは同世代であるが、シェイクスピアと他の同世代の劇作家（リリー、キッド、チャップマン、グリーン、ナッシュなど）についてホープのやり方でうまく識別できるかは分からない。作品間の識別になると、より難しくなる。より小さい単位の識別、つまり特定の場の識別になると、かなり信頼度は落ちるであろう。また同定対象作家の候補が特定されている場合は、ホープの識別法で比較的うまくいくかもしれない。二人を超える匿名の作者が関与しているかもしれない作品は、ホープの識別方法では、少なくとも統計学的には無効の場合が多くなるだろうと予想する。ホープの作者同定を援用するのは結構であるが、ホープの解析には以上のような限界があることを認識しておく必要がある。

注

本稿は、平成29年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究課題番号16K02452）による研究成果の一部である。

- 1 たとえばシェイクスピアとマーロウの *who* と *that* の使い方を見てみると、シェイクスピアの後期サンプル劇10編における関係代名詞 *who* の物を先行詞とする用例比率は12パーセントであるが、マーロウのサンプルには用例が見えない。*that* の非制限用例率はシェイクスピア後期作品が12パーセント、マーロウが18パーセントである（Hope 161）。
- 2 ホープの『エドワード三世』に関する解析の拙評については、Ota 69-70参照。
- 3 筆者は検証作業において、オンライン・データベース *English Drama* を利用した。必要に応じて、*Early English Books Online (EEBO)*、*Eighteenth Century Collections Online (ECCO)* を参照した。
- 4 ホープの言う非標準用法の肯定平叙文には、“I did go home”のように強調用法かそうでないかの判断が難しいものが含まれている。これはホープも認めているが、調査した全劇作家の用例を同一基準で数えており、肯定平叙文の強調用法が誤って非標準用例として計算されても調査結果に影響を及ぼさないという（Hope 16）。ターリンスカヤもホープと同じく、疑問文あるいは否定文でない限り、pleonastic “do” とカウントしている（Tarlinskaja 29）。
- 5 ホープの資料では、フレッチャー劇における *do* 助動詞非標準用法の肯定平叙文の出現率は限りなくゼロに近い印象を与える。しかしもちろん、決してゼロではない。たとえば『ヴァレンティニアヌス』（*Valentinian*）5幕4場（約250行）には、pleonastic “do” が計4回出現する。
- 6 ホープは実際、有意のサンプルサイズは用例（token）が50回以上現れる場であるとしている（Hope 24）。
- 7 シェイクスピア劇の行数は、Alfred Hart, “Number of Lines” 21に拠る。
- 8 この非標準的否定文は、ホープの言う非標準的否定文とは異なり、命令文も含んでいる。ホープの非標準例は命令文を含まない。
- 9 1796年に出版されたH・アイアランドのシェイクスピア贋作『ヴォーティガン』（*Vortigern*）に

は、ホープの言う助動詞 do の非標準的肯定平叙文が異様に多く（全場計160回以上、10行に1回以上）現れる。アイアランドは、これで手っ取り早くシェイクスピア劇らしさを出そうとしたのかもしれない。

- 10 有意水準0.01で有意差ありとは、分かりやすく言えば、99パーセントの確かさで有意差ありと判定できるということである。カイ二乗検定による有意差の判定については、石川ほか編『言語研究のための統計入門』、58-68頁参照。

引用文献

- Bourus, Terri, and Gary Taylor, eds. *The Creation and Re-Creation of "Cardenio": Performing Shakespeare, Transforming Cervantes*. New York: Palgrave Macmillan, 2013.
- Bradford, Gamaliel, Jr. "The History of Cardenio by Mr. Fletcher and Shakespeare." *Modern Language Notes* 25. 2 (1910): 51-56.
- Carnegie, David, and Gary Taylor, eds. *The Quest for "Cardenio": Shakespeare, Fletcher, Cervantes, and the Lost Play*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- Chambers, E. K. *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems*. Vol. 1. Oxford: Clarendon P, 1930. *Early English Books Online (EEBO)*. ProQuest. *Eighteenth Century Collections Online (ECCO)*. ProQuest. *English Drama*. Chadwyck-Healey.
- Hammond, Brean, ed. *Double Falsehood or the Distressed Lovers*. By Lewis Theobald. Arden Shakespeare, 3rd ser. London: Methuen Drama, 2010.
- . "Double Falsehood: The Forgery Hypothesis, the 'Charles Dickson' Enigma and a 'Stern' Rejoinder." *Holland* 165-79.
- Hart, Alfred. "The Number of Lines in Shakespeare's Plays." *RES* 8.29 (1932): 19-28.
- Hope, Jonathan. *The Authorship of Shakespeare's Plays: A Socio-Linguistic Study*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- . *Shakespeare and Language: Reason, Eloquence and Artifice in the Renaissance*. London: Arden Shakespeare, 2010.
- . *Shakespeare's Grammar*. London: Arden Shakespeare, 2003.
- 石川慎一郎、前田忠彦、山崎誠（編）、『言語研究のための統計入門』、くろしお出版、2010年。
- Jackson, MacDonald P. "Looking for Shakespeare in *Double Falsehood*: Stylistic Evidence." *Carnegie and Taylor* 133-61.
- Muir, Kenneth. *Shakespeare as Collaborator*. 1960. London: Routledge, 2013. 148-60.
- Oliphant, E. H. C. "'Double Falsehood': Shakespeare, Fletcher, and Theobald." *Notes and Queries* 12th ser. 5. 91 (1919): 86-88.
- . *The Plays of Beaumont and Fletcher: An Attempt to Determine Their Respective Shares and the Shares of Others*. 1927. New York: Phaeton P, 1970. 282-302.
- Ota, Kazuaki. "Edward III and Statistical Attribution Studies." *Poetica* 87 (2017): 63-79.
- Stern, Tiffany. "'The Forgery of some modern Author?': Theobald's Shakespeare and Cardenio's *Double Falsehood*." *Shakespeare Quarterly* 62. 4 (2011): 555-93.
- . "'Whether one did Contrive, the Other Write, / Or one Fram'd the Plot, the Other did Indite':

- Fletcher and Theobald as Collaborative Writers.” Carnegie and Taylor 115-30.
- Tarlinskaja, Marina. *Shakespeare and the Versification of English Drama, 1561-1642*. Farnham: Ashgate, 2014.
- Taylor, Gary, ed. “Fragments of *The History of Cardenio*.” *The New Oxford Shakespeare: The Complete Works*. Gen. eds. Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, and Gabriel Egan. Modern Critical ed. Oxford: Oxford UP, 2016. 3137-77.
- . “Sleight of Mind: Cognitive Illusions and Shakespearian Desire.” Bourus and Taylor 125-69.
- Vickers, Brian. *Shakespeare, Co-Author: A Historical Study of Five Collaborative Plays*. Oxford: Oxford UP, 2002.

Jonathan Hope's Authorship Study of Shakespeare's "Collaborative" Plays

Kazuaki OTA

Hope's *The Authorship of Shakespeare's Plays*, published over two decades ago, is one of the most highly cited books in recent Shakespeare attribution studies. The present paper reviews the book, arguing that although it offers a valuable documentation of how playwrights responded to the rapid rate of change in English grammar in Renaissance England, Hope's method to combine linguistic and statistical analysis is only of limited use for authorship attribution.

The Authorship of Shakespeare's Plays explores the authorship of Shakespeare's collaborations with Fletcher and Middleton, and the "apocryphal" plays. Hope attempts to determine the authorship of these plays based on what he calls "socio-historical linguistic evidence." He carries out a comparative investigation of the differences between playwrights in the usage of the auxiliary *do*, the relative pronouns *who*, *which*, and *that*, and the second person pronouns *thou* and *you*, and argues that these three forms of linguistic evidence can be used as authorship tools. Of these three, he decides that auxiliary *do* evidence serves as the most powerful tool that can be used for distinguishing playwrights. He examines the percentage of the "regulated" (now standard) use of the auxiliary *do* in each scene of his target texts, Shakespeare's "collaborative" plays, as well as in each of his control texts, Shakespeare sample 1 (six early plays of Shakespeare), Shakespeare sample 2 (ten late plays), and works by other playwrights (twenty-seven plays by five writers). He finds that the average regulation rate of the auxiliary *do* for the two Shakespeare samples (82%) is much lower than that for any non-Shakespeare sample. For example, the average regulation rates for the Fletcher sample and the Middleton sample are 92 percent and 90 percent respectively. Hope uses these collected statistical data to determine the authorship of individual scenes as well as of individual plays.

Hope's approach to authorship attribution based on linguistic evidence has been highly regarded by leading Shakespearean scholars. Brian Vickers calls his method using auxiliary *do* evidence "a new and powerful authorship tool" (*Shakespeare, Co-Author* 121), and Tiffany Stern refers to his "tracing different early modern forms of auxiliary 'do'" as a "brilliant" analysis ("Fletcher and Theobald as Collaborative Writers" 130). The problem is that Hope's comparative analysis using the auxiliary *do* is capable of distinguishing playwrights in some cases but not in others. For example, the overall regulation rates for the Shakespeare samples (82%) and the Marlowe sample (87%) are different enough to discriminate the two writers. However, if we compare the regulation rate of Shakespeare's *Richard II* (83%) and that of Marlowe's *Edward II* (85%) — two English history plays analogous in subject matter — the difference is not great enough to be statistically significant.

Hope's comparative method using *do* evidence can be even more problematic with individual scenes than with individual plays. He states that "a significant sample represents a scene of fifty or more tokens"

and that “the degree of certainty of any ascription will increase with sample size” (Hope 24). However, his method does not work effectively with some of those “longer” scenes that have “fifty or more tokens.” The scene by scene regulation rates for Shakespeare’s “collaborative” plays as well as for the control texts are given in the Statistical Appendix (Hope 156-76), and the figures for many of the scenes of “fifty or more tokens” which critics claim Shakespeare may have written appear much closer to the figures for non-Shakespeare plays than to those for the Shakespeare samples. For example, three of the five scenes of *The Two Noble Kinsmen* which many critics believe were written by Shakespeare show more Fletcherian than Shakespearean regulation rates (1.01=90%, 5.01b=89%, 5.04=90%). The regulation rates for two of the three scenes of *Edward III* (1.02=91%, 2.02=90%) which many Shakespearean scholars agree were written by Shakespeare are significantly higher than the average rate for the Shakespeare samples (82%). This indicates that Hope’s comparative analysis based on auxiliary *do* evidence is not always a dependable tool to identify Shakespeare’s hands in his “collaborative” plays.